

『太平広記』にみえる陸羽史料の解説及び訳注

抄録

陸羽(七三三―八〇四年?)は、唐代の茶人・文化人である。さて、私は、これまで陸羽『茶経』などにみえる陸羽の茶事に関心を持っていたが、現在『陸文学自伝』にみえる陸羽像や他書に記載される陸羽の事跡、伝承にも興味を抱いている。そこで、陸羽の関係史料をみていくと、宋の李昉等編『太平広記』に、唐代の作者不詳『大唐伝載』・李肇『唐国史補』・張又新『水経(煎茶水記)』の記載を採録したとする陸羽に関する文章が三篇ほどみられることを知った。従来、訳出がなされていない様なので、今回、本稿において試みることにした。

キーワード

陸羽、『太平広記』、翻訳、史料、茶

A Translation of Three Historical Texts About Lu Yu (陸羽) in
Taiheikoki (『太平広記』)

Misa Tanaka

Abstract

Lu Yu was a master of tea and a man of culture in China during the Tang (唐) dynasty. I have studied Lu Yu's writings about tea, especially his book titled *Chajing* (『茶経』), by examining the spiritual elements of tea he elaborated on, and other related topics such as production processes of tea and how to prepare the drink. At present I am focusing on Lu Yu's autobiography, as well as profiles and legends about him written by other writers. The three historical texts I have translated here present Lu Yu as a half-legendary figure. As far as I know, they have not previously been translated into Japanese. The texts were written in the Tang dynasty and later included in *Taiheikouki* as slightly revised versions.

Key Words

Lu Yu (陸羽), *Taiheikouki* (『太平広記』), translation, historical texts, tea

田中美佐

近畿大学短期大学部助教
2005年10月7日受理

目次

訳出にあたって

陸鴻漸 『太平廣記』 卷第八十三 異人三 解説・訳・注

陸鴻漸 『太平廣記』 卷第二百一 才名 解説・訳・注

陸鴻漸 『太平廣記』 卷第三百九十九 水 解説・訳・注

参考文献

本稿使用底本

訳出にあたって

陸羽（七三三—八〇四年？）は、唐代の茶人・文化人である。彼は竟陵（現在の湖北省天門県）の智積禪師の下で育ち、後、寺を出てしばらく俳優一座にいたが、大官の李齊物や崔国甫に認められていった。安史の乱中、その騒乱を避け、呉興（現在の浙江省湖州市）に近い苕溪に落ち着いた。そこで皎然ら詩僧や隱棲者と親交を深めていった。さらに湖州刺史となった顔真卿とも交わり、顔真卿の下、多くの学者とともに『韻海鏡源』の編集に携わった。このように陸羽は、詩僧・士人・隱棲者など、当時の江南の学識者・官僚・自由人等と闊達に交流できる環境にあった。陸羽の人となりは、『文苑英華』卷七九三に記載される『陸文学自伝』から窺うことができる。陸羽は、他の人の考えに縛られることなく、自分の意志で彼の人生を歩んでいった。すなわち処士陸羽である。この『陸文学自伝』については、西脇常記『陸文学自伝』考（西脇常記『唐代の思想と文化』創文社 二〇〇〇）、西脇常記『陸文学自伝』訳注（『新潟大学教養部研究紀要』卷一二 一九八一—一九九一頁）、川合康三『自分とは何か―「自伝」の登場』一 陸羽の自伝（川合康三『中国の自伝文学』創文社 一九九六）に詳しい。

さて、私は、これまで陸羽『茶経』などにみえる陸羽の茶事に関心を持っていたが、現在『陸文学自伝』にみえる陸羽像や他書に記載される陸羽の事跡、伝承にも興味を抱いている。そこで、陸羽の關係史料をみていくと、宋の李昉等編『太平広記』に、唐代の作者不詳『大唐伝載』・李肇『唐国史補』・張又新『水経（煎茶水記）』の記載を採録したとする陸羽に関する文章が三篇ほどみられることを知った。従来、訳出がなされていない様なので、今回、本稿において試みることにした。

この『太平広記』は、宋の李昉らの奉勅撰で漢から五代までの小説史料を広く集めたもので、その出典は多くの場合、明記されているが、塩卓悟氏（塩卓悟・河村晃太郎 譯注『太平広記』婦人部 汲古書院 平成一六—三六頁）によれば、『太平広記』作成上の問題点の一つとして同じ話が二度出てきたり、原典の話を適当に刈り込んだり、あるいは原典に直接当らずに節録された二次史料をみてそれをそのまま引用したりするといった杜撰な態度が間々見受けられるという点が指摘されている。本稿でも、『太平広記』と採録したとする原典との間に、多少なりとも語句の異同や文章の省略、また場合によつては、採録したとする原典以外からの引用がみられるため、解説にその点を付すことにする。本稿の底本としては、中華書局 一九六一年第七版を用いる。これは一九五九年に談愷刻本を底本とし、明沈氏野竹齋鈔本他から校勘を施した人民文学出版社刊行の『太平広記』に若干の改定を加えたものである。将来的には、唐代に遡って、改めて『太平広記』中に採録された『大唐伝載』・『唐国史補』をはじめ、『封氏聞見録』などにみえる陸羽に関する記載も訳出していきたくと考えている。

陸鴻漸 『太平廣記』 卷第八十三 異人三

竟陵僧有於水邊得嬰兒者。育爲弟子。稍長。自筮得蹇之漸。繇曰。鴻漸于陸。

其羽可用爲儀。乃姓陸。字鴻漸。名羽。羽有文學。多意思。狀一物。莫不盡其妙。茶術最著。鞏縣陶者多爲甃偶人。號陸鴻漸。買十器。得一鴻漸。市人沽者不利。輒灌注之。羽於江湖稱竟陵子。於南越稱桑苧公。貞元末卒。出國史補

〈解説〉

『太平広記』卷第八十三は、『唐国史補』卷中 陸羽得姓氏より採録したとする。『太平広記』の記載と、『唐国史補』の記載とを比べると、多少の文字の異同もみられるが、両者のもっとも大きな相違は、『太平広記』の文章の「貞元末卒」の前に『唐国史補』には八十字程の文章（與顔曾公厚善。及玄眞子張志和爲友。羽少事竟陵禪師智積。異日在他處聞禪師去世。哭之甚哀。乃作詩寄情。其略云。不羨白玉蓋。不羨黃金疊。亦不羨朝入省。亦不羨算入臺。千羨萬羨西江水。曾向竟陵城下來。）がみられる事である。このように『太平広記』では『唐国史補』に比べて、この部分が大幅に欠如している。その内容を具体的に記せば、陸羽と顔真卿・張志和との親交関係、また師の逝去を悼んで『全唐詩』にも記載される歌を詠んだ事情、及びその歌などである。

*在 底本として使用している叢書集成初編（中華書局）には「狂」とあるが、学津討原本に「在」とあり、この「在」の方がより意味が通るので、本稿では「狂」を「在」に置き換えて、以下考察する。

〈訳〉

竟陵¹⁾の僧で、水辺で赤ん坊を拾ったものがいた。そしてその子を育てて弟子とした。その後、その子は大きくなって、自分で卦をたて、「蹇の漸に之く。」という卦を得た。その占辞²⁾では、「鴻 陸に漸む。その羽用つて儀となすべし。」と言っている。したがって、姓を陸³⁾とし、字を鴻漸とし、名を羽とし

たのである。陸羽は文学の才能があった。意欲的で、一つものについて述べたのに、精細にとことんまで追求した。茶に関する識見が最も秀いでいた。鞏県の陶工⁴⁾の多くは、陶磁器の人形を作った。それを陸鴻漸と名づけ、器を十個買えば鴻漸の人形一個がもらえた。商人は、茶の商いの利益があらないうと、この人形に湯を注いだ⁵⁾。陸羽は江湖⁶⁾においては竟陵子と称し、南越⁷⁾においては桑苧翁⁸⁾と称した。貞元⁹⁾の末に亡くなった。『唐国史補』から採録した。

〈注〉

(1) 竟陵 今の湖北省天門県。なお県城の北門外に陸羽を記念した「文学泉」がある。

(2) 占辞 占辞の内容は、『易経』漸の卦の上九にあり、高田真治・後藤基巳『易経』によると、上九は陽剛居極、鴻が達すなわち天空はるかなる雲の大路にまで飛び進んだ象（原文の陸の字を達に解する）。その羽は美しくりつばで儀（儀式の飾り）に用いるに足るほどで、吉であると（高田真治・後藤基巳訳『易経』下 岩波書店 一九六九 一四七頁）。また本田濟『易』によれば、加えて上九の解説に、俗界の外に飛び出した、孤高の隠者は、この社会に全く無用の存在のようだが、その高潔な態度（＝其羽）、もって人の儀表（＝儀）とするに足るとある（本田濟『易』朝日新聞社 一九九七 四四四頁）。本田氏の解釈などまさに前述の『陸羽自伝』や『茶経』に顕われる陸羽の高邁な姿勢を言い表しているようで小気味よく感じると、さらに陸羽が何故、陸羽や陸鴻漸と称したか、また処士としてどのような意識で過¹⁰⁾ごしていたかをより深く考える手懸りともなろう。

(3) 陸姓については、続く『太平広記』卷第二百一に「竟陵龍蓋寺僧姓陸」とみえ、陸羽を拾って育てた僧の姓が陸であるとする。布目潮風氏は、「陸羽の姓は、陸羽を拾って育てた竜蓋寺の智積禪師の姓が陸であることに基づく。これは唐代の律においてきめられた方法である。中国では異姓の養

子は法的には認められないが、捨て子の場合は、三歳以下であれば、収養が許され、その姓に入る。」と説明する（布目潮風 『茶経詳解』 淡交社 平成一三 三四四頁）。

(4) 鞏県の陶工 鞏県は現在の河南省鞏県より東方に位置した。また河南省鞏県では三カ所の唐代窯址が発見され、白磁を主体に黒磁と三彩陶器を焼造していたことが確認されている。

(5) 訳出の際、『大唐伝載』の「有交易則茶祭之。無則以釜湯沃之。」を参考にした。

(6) 江湖 揚子江と洞庭湖のあたり。

(7) 南越 南越とは、今の広東・広西地方を指すが、ここでの南越とは、むしろ江蘇・浙江省付近を指す古名の越であろう。実際、陸羽は安史の乱中、居を湖北省より浙江省に遷していることから考えても、現在の中国江南地方であると思われる。

(8) 桑苧翁 史念書氏は、『吳興史』巻一八の隱逸『桑苧翁』に「初隱居苧山、自称桑苧翁、・・」とあることを指摘している。そして、その苧山を余杭（浙江省余杭余杭鎮）にある苧山であると考察している。（史念書『全唐詩』 中の陸羽資料考述）『中國農史』 中国農業歴史学会 農業出版社 一九八四 一期 九〇頁。また、『新唐書』 巻一九六 列伝第一二一 隱逸 陸羽伝に「上元初、更隱苕溪、自稱桑苧翁、・・」とみえ、陸羽は自ら桑苧翁と名乗ったことが記載されており、『太平広記』では、「桑苧公」とするが、本稿では、「公」を「翁」に置き換えて訳した。

陸鴻漸 『太平廣記』 卷第二百一 才名好尚附

太子文學陸鴻漸、名羽。其生不知何許人。竟陵龍蓋寺僧姓陸。于堤上得一初生兒。收育之。遂以陸爲氏。及長。聰俊多聞。學瞻辭逸。恢諧談辯。若東方

曼倩之儔。鴻漸嗜茶。始創煎茶法。至今鬻茶之家。陶爲其像。置於錫器之間。云宜茶足利。至太和。復州有一老僧。云是陸僧弟子。常諷歌云。不羨黃金壘。不羨白玉杯。不羨朝入省。不羨暮入臺。唯羨西江水。曾向晉陵城下來。鴻漸又撰茶經二卷。行於代。今爲鴻漸形者。明鈔本者作貌。因目爲茶神。有交易則茶祭之。無以釜湯沃之。出傳載

〈解説〉

『太平広記』 卷第二百一は『大唐伝載』より採録したとするが、この両者を比較すると『大唐伝載』の記載より『太平広記』の記載の方が、かなり詳しくなっている。『大唐伝載』の記載の全文は、ただ「陸鴻漸嗜茶。撰茶經三卷。行於代。常見鬻茶邸。燒瓦盜爲其形貌。置於甗釜上左右爲茶神。有交易則茶祭之。無則以釜湯沃之。」とあるのみで、結論からいえば、多少の語句の異同・文章の改削等は見られるものの、『太平広記』 卷第二百一が『大唐伝載』より採録した部分は、恐らく内容的には「鴻漸又撰茶經二卷。行於代。今爲鴻漸形者。明鈔本者作貌。因目爲茶神。有交易則茶祭之。無以釜湯沃之。」の部分であろう。『太平広記』の記載にみえる、陸羽の出生、人となり、才能、またその才能が漢代の東方曼倩の様だとする点、陸羽の茶事に関する記載、茶を売る店で繁盛を願うため陸羽像が錫器の中に置かれたこと及び陸羽の弟子という僧の諷う歌の部分は、おそらく、陸羽の生没年に近い唐の趙璘撰『因話録』 卷第三 商部下から採録したと思われる。

〈訳〉

太子文學陸鴻漸¹⁾は、名は羽である。どこで生まれたのかはわからない。竟陵の龍蓋寺の僧で陸という姓のものが、堤の上で一人の赤ん坊を拾い、その子をつれて帰って育て、そして氏を陸とした。成長すると、聰明でさしく、博学で、学識がゆたかで、文章も秀でており、彼の著した詠諧（おどけばな

し）・談弁（ものがたり）は、漢代の東方曼倩に例えられる。陸羽は性分として、茶を愛好し、始めて煎茶の範を創った。今日、茶を売る店では、陶器製の陸羽像を造り、その像を錫器の中に置いている。茶の利益をますのによいからであると言っている。太和年間となつて、復州に一人の老僧がいた。彼は、陸僧の弟子だと言ひ、いつも次のような歌を諷っていた。

（富貴な身分の方の持つ）黄金の酒器を羨まず
白玉の杯を羨まず

（立身出世し）朝に入省することを羨まず

暮に入台することを羨まず

唯、羨むのは、（大地を流れる）西江の水だけで
かつて、竟陵の城下に流れきた

陸羽はまた『茶経』三巻を著し、それは、読み継がれている。今日では、陸羽の姿をつくつて、それを茶神とみなしている。茶の取引があれば、茶を茶神に祭り、取引がなければ釜の湯を茶神の像にかける。『大唐伝載』から採録した。

〈注〉

- (1) 太子文学陸鴻漸 陸羽を太子文学とするのは、『新唐書』卷一九六によれば、陸羽は太子文学を拝したからである。また同書からは、陸羽は太常寺太祝も拝したことが載るが、職に就かずとあり、両職ともに実際就いたかどうか判断できる十分な史料はなく、不明である（西脇常記 前掲論文「陸文学自伝」考」一三九頁 注24）。
- (2) 竟陵の龍蓋寺 竟陵にあった陸羽の師である智積禪師の寺。後の西塔寺。但し、現存しない。
- (3) 東方曼倩 東方朔のこと。前漢の人。字は曼倩。詠諧・談弁にすぐれており、一方で、直言・切諫もした。官は太中大夫給事中まで上った。（漢

書』卷六五)

- (4) 煎茶 現在のわが国の煎茶とは異なり、陸羽のそれは固形茶を粉末にし、釜に入れて煮てから、たしなむ。
- (5) 太和年間 八二七―八三五年。
- (6) 復州 湖北省東部。唐代、竟陵を含む地域。
- (7) この歌は〈解説〉で述べた様に『因話録』から採録していると思われる。但し、文字の異同等があるのでそれらについては、注(8)・(12)・(13)で解説する。

(8) 酒器 この歌は、『因話録』の他、『唐国史補』・『全唐詩』にもみえる。さて、この三書は、いずれも壘を壘とする。壘とは、さかだるの意で、形は壺に似ていて雲雷紋がある青銅製や陶製の酒や水を入れる器である。この「壘」の方が、歌の意味がよく通じるため、本稿では、「壘」を「壘」に置き換えて酒器と訳す。

(9) 省 中央官衙の尚書省、中書省、門下省等を指す。

(10) 台 中央官衙の御史台を指す。

(11) 西江 竟陵に流れ込む河川か。

(12) 『太平広記』・『全唐詩』にみえる「唯羨西江水」の箇所は、陸羽の生没年に近い前掲『唐国史補』・『因話録』などの記載では、「千羨萬羨西江水」となっている。

(13) 『太平広記』では晋陵とあるが、『全唐詩』では、金陵となっている。また、前掲『唐国史補』・『因話録』などの記載では、「曾向竟陵城下來。」とあって、竟陵となっている。『太平広記』にみえる晋陵は現在の江蘇省常州市、『全唐詩』にみえる金陵は現在の江蘇省南京市である。『唐国史補』に「羽少事竟陵禪師智積。異日在他處聞禪師去世。哭之甚哀。乃作詩寄情。其略云。」とみえ、この『唐国史補』の記載を補って解釈するならば、智積禪師を偲ぶにあたっては、この晋陵、金陵よりむしろ『唐国史補』・『因

話録』に記されるように禪師の居所であった現在の湖北省天門県にあった竟陵の方が、ふさわしいと思われる。従って、本稿では、「晋陵」「金陵」をとらずに、「竟陵」に置き換えて訳した。なお、この晋・金・竟の発音が類似しているために、異同が生じた可能性もある。さて、金陵であれば、西江は西より流れくる大江としての長江の意とれようが、竟陵であれば、この場合の西江の解釈は、例えば竟陵に流れ込む天門河の様に、注①で述べた「竟陵に流れ込む河川か」という解釈が適当であろう。

(4) 現存の『茶経』は、『大唐伝載』にみられる様に、三卷すなわち、卷上(一之源、二之具、三之造)・卷中(四之器)・卷下(五之煮、六之飲、七之事、八之出、九之略、十之図)よりなる(布目潮風『中国の茶書』平凡社 一九七六 一四—一五頁)。よって、本稿では、「二」を「三」に置き換えて訳した。

陸鴻漸 『太平広記』 卷第三百九十九 水井附

元和九年春。張又新始成名。與同恩生期於薦福寺。又新與李德裕先至。憇西廊僧玄鑿室。會纔有楚僧至。置囊而息。囊有數編書。又新偶抽一通覽焉。文細密。皆雜記。卷末又題云煮水記。記原作處。據明鈔本改。太宗朝。李季卿刺湖州。至維揚。遇陸處士鴻漸。李素熟陸名。有傾蓋之歡。因赴郡。抵揚子驛中。將食。李曰。陸君善茶。蓋天下聞。揚子江南零水。又殊絕。今者二妙千載一遇。何曠之乎。命軍士信謹者。挈餅操舟。深詣南零取水。陸潔器以俟。俄水至。陸以杓揚水曰。江則江矣。非南零者。似臨岸者。使曰。某棹舟深入。見者累百人。敢給乎。陸不言。既而傾諸盆。至半。陸遽止。又以杓揚之曰。自此南零者矣。使蹶然大駭。馳下曰。某自南零齋至岸。舟邊半。懼其鈔。挹岸水以增之。處士之鑿。神鑿也。其敢隱欺乎。李大驚賞。從者數十輩。皆大駭愕。李因問陸。既如此。所經歷之處。水之優劣可判矣。陸曰。楚水第一。晉

水最下。李因命口占而次第之。出水經

〔解説〕

『太平広記』 卷第三百九十九で採録したとする『水経』とは、ここでは、唐の張又新『煎茶水記』を指す。『水経』は、酈道元の『水経注』とまぎらわしいので、後『煎茶水記』と改められた(布目潮風 『中国茶書全集』上巻 汲古書院 昭和六二 三八—三九頁)。以下、本稿でも『水経』ではなく『煎茶水記』の名称を用いる。さて、『太平広記』にみえる『煎茶水記』の採録部分と、『煎茶水記』自体とを比べると、本稿で解説した前二編の『太平広記』とそれぞれ採録した原典の場合と同様、相互に文字の異同等がみられるが、この『太平広記』 卷第三百九十九で特徴的な点は、『太平広記』の採録部分は、『煎茶水記』の文章に比べて前後に大きな文章上の欠けがみられることである。すなわち、前は刑部侍郎劉伯芻が挙げたという名水七等の文章の部分が、後は陸羽が口伝したという名水二十等についての文章の部分が欠けている。勿論、『太平広記』が、『煎茶水記』の全文を載せる必要もないのであるが、『太平広記』の編者が何故、後に続く陸羽の口伝とする名水二十等についての文章の部分までも省略したのかは不明である。さて、『煎茶水記』に附されている歐陽脩の「大明水記」では、この『煎茶水記』に記載される、陸羽が南零の水と岸の水とを弁別した話や名水二十等を口述した話については、歐陽脩自身は、陸羽の逸話とすることに懐疑的である。また、青木正兒氏も、封演『封氏聞見記』 卷六、及び『新唐書』の陸羽伝にみえる李季卿の陸羽を蔑んだような態度やそれに対する陸羽の反応に関する逸話を挙げ、「この『煎茶水記』で李季卿が陸羽を欽待したことは、伝説が正に相反して信じがたい。」とする(青木正兒 『青木正兒全集』 第八巻 春秋社 昭和四六 二五四頁注七)。布目潮風氏は、「陸羽の口述した二十水というのは、(中略)茶が盛んになるにつれて各地の水の品評が行われるよ

うになったのを、張又新が陸羽の名に仮託して二十等のランク付けを行ったというのが真相ではなからうかと思う。」とする（布目潮風 『中国の茶書』 平凡社 一九七六 二十頁）。なお、本稿では、『煎茶水記』の省略部分の文章の掲載は省いた。

〈訳〉

元和九年（八一四）の春、私、張又新は初めて進士に及第し、同期生と薦福寺²²で会合した。私と李徳裕²³が先に来て、西廊下にある僧玄鑑²⁴の部屋で休憩していた。たまたま、いましがた楚²⁵の僧がやって来て、持ってきたふくろを置いて休息した。その中に数編の書物があった。私は何気なく一冊を抜き出してよく見ると、文章は細密で、いずれも雑記であった。巻末に『煮水記』と題が付されている文章があった。以下その内容である。代宗の治世²⁶に李季卿²⁷が湖州刺史²⁸に赴任する途中、維揚²⁹に至った。そこで処士の陸羽と出会った。李季卿はもともと陸羽の名をよく知っており、すぐ親しくなりよしみを交わした。そこで一緒に湖州に行こうとして揚子駅³⁰に至った。食事をとろうとして、李季卿が言うには、「陸羽が茶の名人であることは、天下に聞こえている。揚子江³¹の南零³²の水はまた殊に絶品である。今回、この二つが出会うことは、千載一遇の好機である。どうしてこの機会を無駄に過ごそうか。逃してはならない。」と。正直で謹み深い軍士に命令して、瓶³³を携えて舟を操って、南零に深く入らせ、水を汲ませた。陸羽は茶具を清めて待った。間もなく水がどけられた。陸羽は杓でその水を汲んで言うには、「江の水は江の水であるが、南零の水ではない。岸辺の水のようだ。」と。その使者が言うには、「私は、舟で深く漕ぎ入れ見物の者は幾百人もいます。どうして嘘を申しましようか。」と。陸羽は何も言わずに、そのまま水を鉢にこぼし入れ、半ばまでくると、陸羽はすぐにそれを止めて、ふたたび杓で水をすくいあげて言うには、「ここからが南零の水である。」と。使者は、飛び上がって、大いに驚き

ながら、陸羽の方に駆け寄って言うには、「私は、南零から水を汲んで岸付近に参りますと、舟が揺れて水が半分こぼれまして、私は、水が足りないことを恐れて岸辺の水を採って水を増しました。陸羽処士の御鑑識は神のようでございます。どうして隠し欺くことが出来ましようか。」と。李季卿は大変驚いて賞賛した。従者数十人は皆とても驚愕した。李季卿はそこで陸羽に尋ねた。「これほど鑑識眼がおりなら、今までいかれたところの水の優劣は精しく判別なざることが出来るでしょう。」と。陸羽が言うには、「楚の水が第一であり、晋の水が最下等である。」と。李季卿はそこで筆記することを命じ、陸羽は口授して水の順位を定めた。『水経』から採録した。

〈注〉

- (1) 張又新 唐の憲宗の元和中（この『太平広記』巻第三百九十九の記載によれば、八一四）に優秀な成績で進士に及第した。官は尚書省の左司郎中に終わった。（『新唐書』巻一七五）
- (2) 薦福寺 長安にあった寺。則天武后が文明元年（六八四）高宗追福のために創建した。初め大猷福寺と呼んだが、天授元年（六九〇）に薦福寺と改称された。
- (3) 李徳裕 李徳裕は、宰相李吉甫の子。蔭子であって、進士ではない。大中年（八四九）に亡くなった。（『旧唐書』巻一七四）
- (4) 楚 中国南方、現在の湖北省・湖南省方面の地域。特に湖北省の古称。さて、『煎茶水記』には李徳裕ではなく、李徳垂とあるが、不詳。
- (5) 『太平広記』には「太宗朝」とあるが、太宗の治世は、六二六―六四九年であり、この話に出て来る李季卿の時代とあわない。李季卿の活躍した時期から考えて百川学海本や『中国茶書全集』に収録される『煎茶水記』にみえる代宗朝（七六二―七七九）の方が適切であるので、本稿では、「太宗朝」を「代宗朝」と置き換えて訳出した。

- (6) 李季卿 李適之の子。若くして明経科に合格、詩文に巧みで、宏詞科にも合格した。肅宗朝で中書舎人となるが左遷された。代宗朝で、吏部侍郎・御史大夫となった。度量が大きく優れた人物であった。進賢を務めとした。大暦二年(七六七)に亡くなった。(『旧唐書』卷九九)
- (7) 湖州 浙江省湖州市。
- (8) 維揚 江蘇省揚州市。
- (9) 処士 学識や人格を備えながら隠居して士官しない人。
- (10) 楊子駅 揚州の南、長江北岸にある。
- (11) 揚子江 江蘇省江都県の南に揚子津があり、ここから江を渡った。この江都県の南と鎮江市北部の間の江を指す。
- (12) 南零 江蘇省鎮江市内西北方に金山がある。かつては長江の中にそびえたが、江の流れの変化で現在は河岸の山である。金山西部に中零泉があり、その南に南零泉がある。
- (13) 『太平広記』にはないが、『煎茶水記』に「舟盪覆半」とみえ、本稿では、「覆」の文字を補って訳す。
- (14) 『太平広記』には「水之優劣可判矣。」とみえるが、『煎茶水記』に「水優劣精可判矣。」とみえ、本稿では、「精」の文字を補って訳す。
- (15) 晋 山西省の地域を指している。
- (16) 一般的に中国の人々は、歴史上・地理上の影響もあって、自身の出身地に関しては、南北の意識が強く働くようである。すなわち、自分が南方人であるのか、北方人であるのかをはっきりと意識している場合が多い。陸羽の場合、その確固とした自負心とあいまって、南方人としての意識が、非常に強かったと思われる。陸羽『茶経』にも茶や越州産を北方の産物に比して必ず高位に置くなどからもその様子が窺える(拙稿「陸羽『茶経』にみえる南方意識とその優位性」『近畿大学短大論集』第三六卷第一号平成一五 一一九頁)。また封演『封氏聞見記』卷六「飲茶」の条に「楚

人陸鴻漸は、茶論を書き、茶の効能、並びに煎茶・炙茶の法を説いた。」とみえ、封演は陸羽を「楚人陸鴻漸」と記しているが、私は、陸羽にとつて、この楚を含む長江流域の南方こそが、彼のアイデンティティの基幹であったと考えている。さて、前述の歐陽脩や青木正兒氏の見解のように「楚(南方)の水が第一等であり、晋(北方)の水が最下等である。」が陸羽の言葉かどうかは、疑わしいが、陸羽に特徴的に見られる先に述べた様な中国人の南北に対する意識から考えると、少なくとも南方に自負を抱き、南方をこよなく愛する南方人ならば、「楚(南方)の水が第一等であり、晋(北方)の水が最下等である。」と語っても至極当然であろうと思われる。

(17) 『太平広記』には「李因命口占而次第之。」とみえるが、『煎茶水記』には「李因命筆口授而次第之。」とみえ、本稿では『煎茶水記』の記載の方が意味の通りがよいため、『煎茶水記』で補う。

参考文献

- 西脇常記 『唐代の思想と文化』 創文社 二〇〇〇
- 西脇常記 『陸文学自伝』 訳注 (『新潟大学教養部研究紀要』 卷二二 一九八二)
- 川合康三 『中国の自伝文学』 創文社 一九九六
- 塩卓悟・河村晃太郎 譯注『太平廣記』 婦人部 汲古書院 平成一六
- 鈴木博訳・村松伸解説 『中国名勝旧跡事典 第三卷』 ペリかん社 一九八八
- 高田真治・後藤基巳訳 『易経』 下 岩波書店 一九六九
- 本田濟 『易』 朝日新聞社 一九九七
- 中国硅酸学会編 『中国陶磁通史』 平凡社 一九九一
- 史念書 『全唐詩』 中的陸羽資料考述 (『中國農史』 中國農業歴史学会 農業出版社 一九八四 一期)
- 布目潮瀧 『茶経詳解』 淡交社 平成一三
- 布目潮瀧 『中国の茶書』 平凡社 一九七六
- 布目潮瀧 『中国茶書全集』 上巻 汲古書院 昭和六二
- 布目潮瀧 『中国 名茶紀行』 新潮社 一九九一

青木正兒 『青木正兒全集』第八卷 春秋社 昭和四六
田中美佐 「陸羽『茶経』にみえる南方意識とその優位性」〔近畿大学短大論集〕第三
六卷第一号 平成一五

本稿使用底本

- 『太平廣記』 中華書局 一九六一 第七版
『唐國史補』 叢書集成初編 中華書局 一九九一 北京第一版 津逮祕書影印
百部叢書集成 芸文印書館 清嘉慶張海鵬輯刊 民国五四年 芸文印書館影印
学津討原
『大唐傳載』 叢書集成初編 中華書局 一九九一 北京第一版 守山閣叢書排印
百部叢書集成 芸文印書館 清道光錢氏據墨海金壺刊版重編增輯本 民国五七
年 芸文印書館影印 守山閣叢書
『煎茶水記』 百部叢書集成 芸文印書館 民国十六年武進陶氏覆宋咸淳左圭原刻 民国五
四年 芸文印書館影印 百川学海
布目潮瀕編 『中国茶書全集』上卷所収 旧刊百川学海本影印 汲古書院 昭
和六一
『全唐詩』 台北 復興書局 康熙四十六年序刊影印 民国五十年
『因話錄』 叢書集成初編 中華書局 一九八五 北京新一版 稗海排印
百部叢書集成 芸文印書館 明萬曆中會稽半菴商濬輯刻本 民国五四年 芸文
印書館影印 稗海

〈追記〉

本稿作成にあたっては、文学博士大原良通氏の御助言を賜りましたことを心より感謝致
します。